



帯広畜産大学

Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

発話の生起と伝達の型

その他（別言語等） のタイトル	The Occurrence of an Utterance and the Types of Communication
著者	森下 盈
雑誌名	帯広畜産大学学術研究報告，人文社会科学論集
巻	9
号	1
ページ	1-14
発行年	1994-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1588/00002715/

発話の生起と伝達の型

森 下 盈

(帯広畜産大学英語学研究室)

1993年10月29日 受理

The Occurrence of an Utterance and the Types of Communication

Mitsuru MORISHITA

(I)

先の論稿⁽¹⁾で、伝達行為を概観し、その諸要因について述べたのであるが、ここでは、それらが特に言葉による伝達にどのように関係するかをより詳しく吟味してみたい。従って、話者の伝達内容の媒介が言葉である場合を考察することになるのだが、言葉が有する主要な二つの様相を形成する音声と文字のうち、特に前者に重きを置いて論述を進めて行きたい。前者に重きを置くことは言語研究の自然の態度であり、後者による伝達行為の議論は第二次的 (secondary) であり、前者の説明が後者のそれを包含することもあり得る。

第一の段階として Bloomfield が彼の著者 "Language" のなかで示している発話の過程に関する公式⁽²⁾を基にして述べてゆきたい。それは次のようなものである。

$S \longrightarrow r \dots \dots \longrightarrow s \longrightarrow R$

$S \longrightarrow r$ は話者に関することであり、 S は外界に存在する彼の受け取る刺激を意味し、 r はそれによって彼に引き起こされた反応を表し、それが発話のかたちで現れたときのことを示している。

$s \longrightarrow R$ は聴者に関することであり、 s は話者が聴者に対して発話を行ったとき、後者が受け取る刺激であり、 R はそれによって彼に引き起こされる反応

である。ここでは、 $r \cdots \cdots s$ が伝達行為における直接的過程ということになる。この部分こそが言語研究者にとっての最大の関心事であり、言語研究はこの過程でなされる実際の発話を母胎としてその分析と考察を始める。また、この部分は人間と他の動物を区別する箇所でもある。なぜならば、この過程で人間は signal の体系である言葉を使用するのであり、他の動物は音声による何らかの伝達を行うとしても、人間のそれに比較すると、媒介の十分さと、正確さにおいて、匹敵するものではないからである。

上に示された公式は伝達行為における参加者が二人である場合を示したものであるが、たとえその参加者が三人以上であっても記号配置は変わらず、根本では原理的に同様に説明され得るものである。前稿で触れたように Communicator も Communicatee も複数として存在し得ることが確かめられたのであるが、そのことはそれらが個人的精神作用をもった独立体としての人間から成る以上は、この公式に対して変容を要求する力は無いのである。デモンストレーションのシュプレヒコールの例は、一緒に同一の発話を予め参加者の心に決定させておいて、その後になされたものであり、彼ら一人一人は、例えば物価の値上げ、つまり S に対しては、時が違えば色々な発話を口にすることは明白である。それ故に、そのような場合でも基本的に上の公式の意に沿うものである。同時に Communicatee が複数として存在する例として講演が挙げられたのだが、この場合明らかに講演者の話に耳を傾けている者たちは反応がそれぞれ違うことが多いのであり、聴衆は単に 'Single hearer' の集合体なのである。それ故上の公式をそれは揺るがすものではない。

刺激と反応との関係は心理学の研究対象でもあるが、S から直接に R に移行するかたち、即ち言葉を媒介とすることなしに实际的刺激 (Practical stimulus) が人に实际的反応 (Practical response) を導き出すことにあらわれる刺激と反応の関係と、 $S \longrightarrow r$ 、つまり实际的刺激が言葉を導き出す反応を生じせしめるそれとは、性質を大いに異にする。S の記号のもつ意味あいはいずれも同じであり、それは外在世界のあらゆる事象がその資格をもつ可能性を秘めている。その事象がいかなるものであれ、人間の 'receptors' がそれを感じ取

るならば、それはSの意味あいをもったのである。S → Rという式は単一の人物がその折の状況に参加する場合であり、他者の存在から独立して直接反応を示すのである。刺激と反応の関係では、一定のSに対する個人の反応は、それを受容する際、彼の心理状態が特定の性質を示せば、彼の反応傾向が決まってくると思われる。

S → Rという式での反応はそのようにある程度 inflexible であるが、S → r, つまり speech act での反応はそのような性格を帯びることは殆ど無いと言ってよい程の多様性を有する。勿論、特定の刺激が人に発話をさせる場合、そこには彼の話す特殊性があり、彼に対し以前と同様の刺激が与えられたときに、どのような発話をするかということを目論み得るかも知れない。刺激については、あくまで「同様」という言葉しか使えない程、時間、空間において変化するものである。また刺激が投影される個人の心理状況も時空により差異を示すことは稀でないで、いかに発話形態を predict するとは言えそれは実際には至難のことである。発話の詳細を考慮した場合、同様の刺激が同じ意味の発話を生起せしめることは厳密に言ってあり得ない。というのは、Sとなり得る practical situation が一時も同じ状態にないからである。このことが前述したことに対する重要な理となるのは Bloomfield の次のことばにより明らかである。“We have defined the meaning of a linguistic form as the situation in which the speaker utters it and the response which it calls forth in the hearer.”⁽³⁾

(II)

発話が同じかたちをとっていても、意味する内容、話者が相手に伝えたいことは同じであるという事実もあるかも知れない。だが、厳密にはこのときもそれがもつ意味は同じでないのである。このことはただ同一の刺激が与えられたときに、いろいろな発話が話者によってなされるのだが、それらが聴者に対し“似た”刺激として感じとられるということを示すだけである。例えば、発話者であるAは聴者であるBの小さな弟である。Aは非常に腹が空いていながら、

彼らが村の道を歩いていたとき、リンゴの木が目に入り赤いリンゴが沢山なっているのが見えた。空腹なAにとってはそれがとても食べたくなった。つまりそれは彼にとって強い刺激となったのである。だが、リンゴ園のまわりには柵がしてあるし、木も高かったのでAは自分でリンゴを手に入れることが出来なかった。そこでそばにいる兄にリンゴを取ってきてもらおうと考える。このときAが発する発話にはいろいろなかたちが考えられる。以下のものがある。“I want to eat an apple, because I am so hungry.”, “I want that apple.”, “Please give me that apple.”, “I was just wishing I had an apple.”etc. このことは“normal form of expressions”と“learned form”のそれらの差異にもあらわれていることである。例えば次のようなものがある。“He came too soon” in the normal form, versus “He arrived prematurely.”, “Where are you going”, ? versus “what’s your destination” “so (that) you don’t lose it.” versus “in order that you may not lose it.” and lest you lose it.”このように形式が異なった発話を用いられても、話者が相手に伝えようとするのが同じであるということは、別の言葉で言うなら、これらのいろいろな発話を導き出す可能性を生じせしめる話者の心理状態が同等であるということである。つまり、どのような“linguistic form”から成り立つ発話を用いようとも、話者の意図することが、相手に伝わり、その実現を彼に託して、それが成立すれば使命を果たしたということになる。

このように、同一の刺激が種々の発話を生み出すことは話者のその時の心理状態と彼をとりまく Practical Situation に依存するものである。上の例で、Aがこらえきれぬほど腹が空いているときの発話構成と、あまり空いていないときのそれとは異なるかも知れないし、BがAの要求することを無視するような兄のときと、非常に親切な兄であるときとは生ずる発話も異なるだろう。また、とてもおいしそうなリンゴの場合と、そうでない場合はAを異なって刺激し、彼の発話に影響を与えるだろう。

このように、話者によってなされた linguistic substitute reaction としての発話は聞手に向けられて linguistic substitute stimulus となる。そして聞手

はこの言語刺激に反応し、ここにコミュニケーションが行われる。このときも聞き手の反応は一様でない。たとえ話手がformの面でも、音声の面でも殆ど同じ発話をしたとしても、反応が個人によって異なるどころか、一個人内でも時がたてば異なるのである。聞き手の反応がどうあらわれたかにより、発話がどのように、どの程度理解されたかが分かるのであるが所謂Rはそれが話手の発話のどのような理解に基づくものであるかを判断するのに困難な場合がある。Rが話者にとって目に見えないときである。これは話者の発話の性質とも関係していることであり、それが先程のリンゴの例のように聞き手が具体的に目に見える行為である反応を要求する発話であるなら、判断も容易であるが、それを要求することのない発話はその点で難しい。例えば、講演での一人の話者の発話を聞き手がどれ程に、どのように理解したかを知るには、彼が直接聞き手に意見を求めなければできないことである。

このように、聞き手の反応は先ず根本的に彼の頭のなかに起こるのだが、二つのかたち(1)反応が外的にあらわれる可視的なもの、(2)反応が聞き手の頭のなかにとどまるものがある。これらがいずれも反応である限り、先に述べたように、一つには linguistic substitute stimulus の性質によるものであり、また聞き手の心理に生起する限り、その状態によるものである。話者の発話が聞き手に具体的に目に見える反応を要求しているにも拘らず、それを後者が示さないということは、話を理解していなかったり、理解はしていても何らかの事情で行為に移せないとき、全く否定しているときなどである。先のリンゴの例では、もしBがすぐにAの要求したように行動に出ないとすれば、その発話を理解するのは容易であるから、彼は何か特別な理由を持っていると考えられる。この場合に、彼がAの要求に応じられない理由をことばで示せば、明らかに(1)の型の反応としてあらわれたのである。このときもし彼がAにその理由を明らかにせず、何のことばも出さず、また目に見える行為を何ら示さないとすれば、Aは不思議に思うだろう。このように、(1)の型の反応を引き起こす発話は、聞き手のそれに対する反応をはっきりと要求するものであり、いずれにしても彼の発話理解の程度は知ることができる。だが、長い発話にな

ればなるほど、聞き手の反応に(2)の要素が入ってくるし、とくに発話が即座の具体的行為を要求し得ない純粹に知識に関することなら、反応は(2)の型に落ち着く傾向が強い。このような態度を発話に対し聞き手がとったとしても、彼が十分に理解しているか、それとも殆ど理解していないのかというその発話に対する彼の認識程度が彼の心から外へ出る必要の無いことがこの型の特徴である。

(Ⅲ)

既に述べたように、コミュニケーションが生起するためには、話者と聴者のあいだで交わされる発話が両者に共通の理解を可能にする言語が用いられなければならない。ブルームフィールドが次のように述べている。“Language enables one person to make a reaction when another person has the stimulus.”⁽⁴⁾ このことの実現のためには使用される言葉が伝達行為の participants の思想伝達を可能にする言語体系を必要とする。コミュニケーションの過程は大体次のように説明されよう。話者は伝えたい思想、考えを特定の言語規則の体系に従って、phonetic representation により encode し、それは発声器官によって行われる speech sounds により生み出されるのである。そのような phonetic representation が聴者に伝えられたとき、それが彼の聴覚を刺激し neural signal となり、話者が用いた phonetic representation と同一のものを得、それを言語規則にのっとり、話者が述べ伝言表記に decode し、聴者は彼の言わんすることを理解する。このとき話者と聴者のあいだに伝達が成立するのは彼らの神経組織、思考機能によって起こされた思いや感情を外的に表現するための手段である媒介としての言語が、彼らの獲得物になっており、それが言語規則を同じくするものだからである。

さて、話者によって phonetic representation に encode される彼の伝えようとする思想、考えはどのように発話されるに至るであろうか。話者が所謂成人ならば、種々の事柄を体験した存在であり、それらは彼の頭脳に心理的實在としてある。そのような實在の意味は頭脳のなかの観念であるが、それはかつて

の彼の感覚器官、思考組織に刺激として訴えられたものである。多くの発話はこのように話者の経験と彼をとりまく状況の相互関係から生まれる。ある場面で、話者が特定の発話をしたとき、それはその時彼の感覚器官に刺激となった彼をとりまく外的状況と彼の心理にある mental なものが絡み合っただけなのである。話者の発話の進展は、前の発話が後の発話を生み出すかたちで行われるが、それは前者を構成している心理的 factor が後者の或るそれと密接に関連しているからである。関連している factors が両発話のなかの観念を連合させるはたらきをしている。このような進行方法は発話間以前の問題として実は考える必要がある。発話は話者の思考内容の現れであるから、その連合と切っても切れない関係にある。このことは口に出される言葉に依存せず、思考内容の進展が見られることに明らかである。ある観念が人間に生じたということは、その前の観念が刺激の役割を担い、それを構成する要素と関連性を有するものを神経組織に生じせしめたということである。

以上のことは一人間における発話の連続ということであるが、二名の個人のあいだでのコミュニケーションの成立においても同様のことが言える。話者が相手に向かって特定の発話を行ったとき、後者の神経組織における理解操作はその発話を彼の心理的実在の或るものと関連させ、それとともに思考作用を働かせるということである。このようにして相手の発話を心理作用によって理解するということはパブロフの条件反射の理論に一致する側面があり、心理の一要素と他の要素が関連し、その姿が話者の発話形成にあらわれ、聴者のその発話理解の行為にあらわれる。言語行動がコミュニケーションの成立の点で或る意味で条件反射理論によって説明されることは、言語が人間により後天的に獲得されたものであることに裏付けられている。発話の意味することが、聴者の心理的実在と関連できることがその習得の成果を示すものであり、相手の発話を理解することはこのような連関がどの程度密接であり、どういう意味での連関かということと無関係でない。この連関を構成するものは個々人の経験と、それに結びついてあらわれる観念であって言語そのものではない。ただ、このように人間が実際に自身の感覚と神経経由して味わった事柄とそれとの結びつ

きの上にあられる反応を伝えるときに言語が必要となるということである。個人の感覚をどれほど十分に言語表現が意味することができるかが、言語の象徴性における完全さの問題と結びつく。言語自体が人間の心理を、また外的実在の様相をいかに十分に述べるかは表現する者の言語運用力・技術にも依拠することであるが、言語に完璧な象徴性を求めることも不可能である。

人間の心理すべてを言語で symbolise することは、その複雑さ・微妙さが故に可能でないにしても、個々人はそれをより正確に、より十分に表現する術を持つことを language acquisition の過程の一つの責務として担っている。外的実在も完全に象徴することもまた不可能であるとしても、その様相や性質をできる限り正確に描写することが人間の知識の発展と増大に関係していることである。言語象徴性の不十分さを含みながらも、話者の発話が聴者に多くの場合支障なく理解されることは、発話自体の意味がその枠内にのみとどまるものでなく、その持つ意味がそれ以外の色々な物事や事象と関連し、聴者にそれを把えさせるからと言える。発話にたいするその proper の意味以上の理解は先述の心理的実在と個人の心理作用の活発さがあっていっそう効果的なはたらきをする時にもあられる。

コミュニケーションの生起は異なる存在のあいだでのみ可能なものであろうか。これまでの考察はすべてこれを肯定した考え方に基づいていたし、筆者が前稿で示したコミュニケーションの一般的定義もそうであった。しかし、同一人物においてそれが成立するという例外がある。文字の場合をとり上げると、自分が以前に書き上げた手紙、論文、メモなどを時を違えて読むなら、それらの内容があたかも別の人の言葉のものであるかのように感じられることがあるだろう。また人間はよく独り言 (soliloquy) を言う。しかし、独り言のすべてのかたちに伝達の成立があるわけではない。もし或る人が、“I want to eat an apple” と独り言を口にしたとすれば、これは“リンゴ”を食べたいという彼の欲求がそれを発させたのであり、そのことばが彼に直接伝達の機能を果たしたとは言えない。このことばに続いて、“I will go to a store.” とまた独り言を口にしてもそれは彼自身にたいする伝達のためではない。この二つの発話

は単に彼の思考の連続したあらわれでしかない。このように発話者が自ら意識して発する独り言はそれ自体彼にたいし伝達のはたらきを持つとは言えない。

しかし、話者が無意識に、つまり、自分の発話の意味を少しも感ぜずにそれを発したとき、彼が突然その言葉に影響され何かを感じ、考えるならば、それは前に発されたその言葉が彼に対し伝達の役を担ったことになる。あたかも話者とは異なった思考機能をもつ他の存在がそれを発したかのようである。上述の独り言は明らかに一個人の頭脳内での思考の連続というかたちをとったが故に、伝達のための声とは言われなかったが、この場合は、思考の連続ではなく、不連続の状態を経過したのである。このことをより明瞭に理解するために次のことを述べれば十分であろう。前者の例は表現を音声として言葉に出さずとも上述の二つの発話が示す内容は思考というかたちで無言のうちに連続していたであろう。つまり音声の作用は必要ないのである。ところが後者は、前の発話なくしては後続の思考も生まれず、その表現である発話も生じない。即ち彼自身の声は、それを発する以前の無思考の状態で彼の神経組織を刺激し、何らかの思考を与えたという意味で、声が彼に対する伝達の役割を果たしている。これは例えば、他には、歌をうたっているときに文句の意味を考えていない場合とか、突然個人が発している言葉がある種の感情なり思考を彼に惹起することがある場合にみられる。

上で述べられた事柄は二つの発話間に時間的連続がある場合であった。一個人の自分自身に伝達を行う他の型は時間的隔絶・不連続がある場合である。これの最も卑近な例はテープに自らの声を録音し、次にその声を聞くまでに、思考作用の断絶をもつだけの時間を経過したときに聞いた場合である。このとき聞こえてくる声は当該の個人に特定の感情、思いを引き起こし、ここに一つの伝達行為が行われる。

(IV)

これまで発語の生起と伝達の成り立ちについて見てきたが、ここで伝達の型に目を向けたい。伝達はその Form と Usage に基づくものに大きく分類でき、

前者の型は personal communication と mass communication に分けることができる。後者については informative communication と affective communication に分けて考えてみる。

personal communication は伝達者と被伝達者の直接的接触に依拠する face-to-face の型であり、mass communication においては伝達者と被伝達者のあいだの、間接的な接触に基づき、その多く見られる型は大量伝達の媒体を必要とする。前者では更にその形式が一方的に行われるか、相互的に行われるかの相違があり、それぞれ、one-way communication と mutual communication と呼ぶことができよう。前者の型では伝達が一方から他方へモノローグ的に行われるものである。このような場合では、話者が伝達行為のまさに主体であり、時には聴者の理解に関係なく彼の発話は進行してゆく。後者の型はダイアログ的要素を有し、二人のあいだでの打ち解けた会話、自由に話し合うことのできる議論などにみられる。personal な接触は前者よりも後者が緊密であり、特に伝達参与者としての二人のあいだに起こる person-to-person communication では、彼らの感情・思想の交換が相当充分に行われ、相互理解に好適である。ここでは当該者同志が、相手の興味あるいは知的度合いをある程度心得ていると、交わされる話での話題の設定や使用語いの選択が可能である。

ところが、伝達参与者が増してくると、伝達内容が私的から公的へ、専門的から非専門的へ（参与者の集まりが特別にある専門の話を傾聴するために企画されたものでないなら）と移って行く傾向があり、communicatees は communicator にたいし、次第に間接的に接触するようになる。このような接触が最も強くあらわれるのが第二の型 mass communication においてである。これは巨大な大衆社会のなかで行われるものであり、伝達手段は新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、映画等である。この型の伝達が果たす大きな注目すべき役割の一つは遠隔地で起こった事柄や、その他の直接見、聞き、経験できないことを、まるで communicatees の近辺のことであるかのように感じせしめることであり、またそれらを数え切れぬ程の人々に殆ど同時に、同様に知らせることである。それ故に、この種の伝達の作用は人間の持つ現実的環境のほかに、

pseudo-environment を作り上げ、人はその影響と stimulation のもとで生活している場合が多いことになる。

person-to-person communication で使われることばと、そこでの participants の話し方と、大ぜいの人々に話す場合のそれら、また公衆向けの公式的メッセージを伝えるそれらの間にある程度の差異が認められることは確かである。これは話される situation の雰囲気依存し、話の内容にも依存していることであるが、person-to-person communication では、話すときに自身の感情を十分に発することができるのが普通である。後の二つの場合ではその感情を発することはできるが、制約される傾向がある。

次に usage に基づいて分類される伝達に目を向けてみよう。言葉は、我々がそれをを用いて何ごとかを述べたときに、その結果として或る事が起こった場合、そのことを生起せしめるために instrumental なはたらきを成したのである。言語の有する具的機能は、さまざまな伝達行為にあらわれる最も普通の機能である。「窓を閉めなさい」と言い、それが相手により閉められたとき、発された言語音は窓が閉じられることに影響を与えたわけである。食事の際、砂糖を渡してもらいたいときに、“Pass me the sugar.”と直接要求した場合でも、“The food needs sugar.”と information を送った場合でも、その両方の発話は instrumental な目的を有している。また、ある男の妻が新しいコートを欲しいときに、彼女が夫に“You seem well dressed, especially when compared to me.”と発するかも知れない。これもまた具的機能を果たしている。このような言語の具的性質は伝達行為を usage に基づいて促えられたものであるが、これから言及する二つの型にも同様にあらわれるものである。それらは上述の例で見た後の例にある affective communication と、更に informative communication である。我々の生活にあらわれる discourses には様々なものがある訳であるが、それらを usage に基づいて大きくこれら二つの型に属させるのである。しかし、discourses の持つ性質は極めて複雑であるから、すべてのものがこれらのどちらか一方に必ず属するというものではないので、他方の型の性格も部分的に合わせもつことがあることを考慮に入れておかねばならない。

(V)

表現の解釈の問題を取り分け複雑にしていることは、言語を informative な目的のために使用するということが言語のより深いはたらきと融合しているということである。言語の informative use は、言語の進展過程で比較的高い段階になって起こってきたことである。それが起こる以前は、低いレベルの動物のように、空腹、怒り、寂しさ、恐怖、嬉しさなどの内部の感情の表出として色々な叫び声、あるいはその類を発するだけであつたろう。徐々にそれらが言わば“noises”に分化して行き、人間の意識内容も拡大していった。遂にはそれらが言語形式を生むようになったのであろう。例えば、歯が痛むときに、“Oh, Oh!”という代わりに、“My tooth hurts.”と発話することは informative な表現を用いたということの意味する。次に、我々の日常生活にあらわれる discourses のうちのいくつかの種類を取り上げ、それらの特徴について述べて行きたい。

科学的 discourse の伝達的特徴はそれが専門化された informative communication を生み出しているところにあり、そこにおける内容は referential meaning に依り成り立っている。この種の意味には殆ど人の感情、気分とは関係をもたなくてよい。ただそれは「述べるところを、述べる」というものである。その種の discourse では、換言すると、所謂“sense”が最も重要なものであり、話者の発話に抱く聴者の feeling や、話者が述べている題材に対してもっている態度から生ずる tone はさして重要でない。

この型のコミュニケーションに属する内容を持つ別のもは、広い意味における“technological discourse”である。これはいかに目標としている事柄を身につけるかを教示するところに主眼があり、それ故その表現は規範的である。そこにおける目標は何であっても構わず、例えば、「いかに特定の外国語を話すか」ということまでをも含む、「ピアノの弾き方」、「登山の仕方」、「計算の仕方」などにも関与する。いかなる事にも目標はあるから、倫理学、数学、その他諸々の分野における“technological discourse”が関わりを持っている。他

に, *informative discourse* に属するものとして “*mythical*” なそれも取り上げなければならないであろう。これは, ある集団, 或いは個人によって同調されるものではないかも知れないが, とにかく “*mythical*” なものを生き生きと他者に知らしめるのである。

次に言語の “*affective*” な側面に目を向けて上述のものと同様に, *usage* に基づく分類の型の一つである *affective communication* を考察してみよう。J. C. Condon が彼の著書 “*Semantics and communication*” のなかで次のように述べている。 “*Communication in which the message is the emotional feelings of the speaker toward a listener is known as affective communication.*”^① “*affective*” という言葉が, “*affective uses of language*” のような句で用いられるとき, それは言葉が生み出す「強い感情」を示しているし, それによって喚起される非常に高尚な反応, ときには無意識のそれをも示している。

informative communication は知識や行動方法を告知することが主たる目的であり, またそれは日常生活に必要な作業を成さしめる点では具的 (*instrumental*) である。しかし, それは生きて行く上で人生がどのような感じのものであるかは殆ど語らない。我々は科学的事実を伝達する際には, *Communicator*, *Communicatee* として, お互いの感情に注意し, それを悟るということは余り必要がない。だが, 人間が愛, 友情を育て, またそれと共に社会的行動をとるために, “*emotion*” や “*feeling*” の重要性を考慮しなければならないわけであり, その実現が一つに “*affective use of language*” によって可能なのである。H. Walpole はこの役割を果たすものを “*emotive language*” と称し, 次のように述べている。 “*Emotive language expresses the speaker's feelings and aims at stirring those of the hearer and perhaps spurring him on to some action*”^②

全体としての表現が *affective* な意味を有する構成である場合がある一方, 単語自体それを含んでいるものがある。“*home*” という語は, “*factory*”, “*house*” “*building*”, “*stable*” などと比較すると, より *affective* であるし, “*beautiful*” は “*hard*”, “*opposite*”, “*electric*” などよりも *affective* である。

次に例を挙げて affective な要素の実現を見てみよう。“government of the people, by the people, for the people.”においては、同じ語の繰り返しが affective な力を示すのに役立つばかりでなく、その文法構造 (grammatical structure) がそれに役立っている。このような表現の仕方は科学的陳述には縁のないものである。例えば、上の表現は“A people’s government”と単一の句で言い換えができるかも知れない。しかし、それは例の句よりも人に訴えるものが少なく、そこでは同じ語の反復により affective な内包性が巧みに表象されている。

注

- (1) Semantics and Communication (The Macmillan Company, 1966) p.92
- (2) Semantics—The Nature of Words and their Meanings—
(Greenwood press, Publishers 1941) p.40
- (3) Language (Henry Holt and Company, 1933)p.139
- (4) *ibid*, p.24